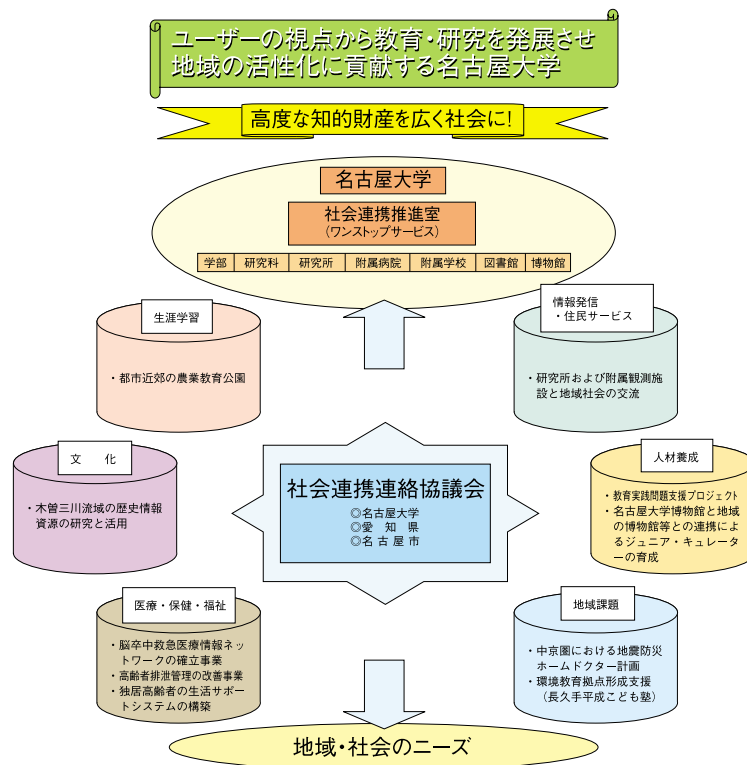




# 名大トピックス

No.122 平成15年7月31日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TeK(052)789-2016  
ホームページ URL http://www.nagoya-u.ac.jp

## 名古屋大学の社会連携の取り組み (地域貢献特別支援事業)



(名古屋大学地域貢献事業全体図)

### CONTENTS

・地域貢献特別支援事業を更に充実.....	2	・博物館が第4回ネイチャーウォッチングを実施する.....	14
・第44回名大祭「夢空間」が開催される.....	3	・第4回エコツアー(スタンプラリー)が行われる.....	15
・生物機能開発利用研究センターの銘板上掲式が行われる.....	4	・太陽地球環境研究所が一般公開・講演会を実施する.....	16
・SARS 緊急対策ガイドラインに関する全学説明会が開催される...	5	・太陽地球環境研究所が「理科はおもしろい」シンポジウムを開催する.....	17
・「第2回産学官連携推進会議」が開催される.....	6	・附属農場が農業館を利用して連続講演会(第1回・第2回)を開催する.....	18
・大学院生命農学研究科が学術交流協定を締結する.....	7	・大学院生命農学研究科が消防訓練を行う.....	20
・中期目標・計画・評価に関する職員説明会(第1回)が開催される.....	8	・構内環境美化運動「キャンパスクリーンウィーク」が実施される.....	21
・第99回国立10大学理学部長会議が開催される.....	9	・地下鉄「砂田橋-名古屋大学」間が今年12月13日に開業...	21
・医学部組織工学(日立メディコ)寄附講座の創設記念式典等が開催される.....	10	[ INFORMATION ]	
・(財)武田科学振興財団研究奨励金の贈呈が行われる.....	11	・ 本学関係の新聞記事掲載一覧(15年6月分).....	22



・電子密度分布に見る化学結合の普遍性  
森永正彦..... 12



## 地域貢献特別支援事業を更に充実

国立大学の優れた地域貢献の取り組みに対して、重点的に支援するために文部科学省が平成14年度より創設した「地域貢献特別支援事業費」に、今年度も74大学から事業の提案があり、「地域貢献特別支援事業選定委員会」における書面審査及びヒアリング審査を経て、26大学が選定されました。

本学からも、「高度な知的財産を広く社会に！」をキーワードとして、学内での審査を行った上で下記の地域貢

献プラン(10事業)を申請し、特に優れた地域貢献の取り組みとして昨年度に引き続き選定されました。

なお、本事業費については、自治体と国立大学との将来にわたる真のパートナーシップ面や大学全体としての地域貢献の組織的、総合的な取り組みの推進を目的とするものであるとの趣旨を踏まえ、事業の継続性を担保する観点から、平成15・16年度の2ヶ年計画での申請を可能とし、選定されたものです。

### 事業概要（文部科学省平成15・16年度地域貢献特別支援事業費の選定分）

分野	事業名	事業のポイント・概要	連携自治体等
生涯学習	都市近郊の農業教育公園 (大学院生命農学研究科)	ゼロエミッションへの取り組みや、大学の研究教育に身近に触れ、農業を理解できる公園の整備	東郷町、三好町、日進市
医療・保健・福祉	脳卒中救急医療情報ネットワークの確立事業 (大学院医学系研究科)	本事業は、愛知県内の基幹病院、救急病院、開業医を情報化技術で連結し、脳卒中に対する新しい超急性期救急医療体制を確立する。本学にはその中核施設として脳卒中医療管理センター(仮称)を創設する。	名古屋市、愛知県医師会
	高齢者排泄管理の改善事業 (大学院医学系研究科)	愛知県における高齢者の排泄管理向上の目的で、(1)講習会の実施、(2)マニュアルの作成、(3)指導士の養成、(4)テキストの作成、(5)センターの運営等の事業を行う。	愛知県
	独居高齢者の生活サポートシステムの構築 (先端技術共同研究センター)	独居高齢者に必要とされる生活支援を行うため、緊急通報装置、生活モニタリング装置、安否確認装置、遠隔支援装置などからなる総合的なサポートシステムを構築し、それを試験運用することにより、構築したシステムの問題点や有効性を検証し、名古屋市における実システム稼働に結びつけることを目的とする。	名古屋市
人材養成	教育実践問題支援プロジェクト (大学院教育発達科学研究科)	本事業は、東海市教育委員会と名古屋大学教育発達科学研究科が連携し、小・中学校の教育実践上のさまざまな問題を整理し、理論的背景を有する解決方法を見出し、教育実践を支援することを目的としている。あわせて、これらの取り組みを通して教員の資質向上を図ることをねらいとしている。	東海市
	名古屋大学博物館と地域の博物館等との連携によるジュニア・キュレーターの育成 (博物館)	大学博物館が地域の博物館等と連携して、「理科離れ」、「モノ離れ」、「自然離れ」した中学生や高校生を対象に、「創造的探求心」と「まっとうな自然観」をもち、「モノ」を見て考えることのできる若者(ジュニア・キュレーターと呼ぶ)を育成し、人材育成で地域貢献を果たす。	名古屋市
文化	木曾三川流域の歴史情報資源の研究と活用 (附属図書館)	木曾三川流域の歴史的古文書の整理・研究とデジタルアーカイブ化を行い、地域の文化財保存とその活用を支援するとともに、コラボレーションシステム開発を通じて、自然と人間の関係史を中心とする生涯学習・総合的学習へのコンテンツ提供及び地域研究そのものの活性化を図る。	愛知県、岐阜県上石津町
情報発信・住民サービス	研究所および附属観測施設と地域社会の交流 (太陽地球環境研究所)	研究所本部がある豊川市及び附属観測施設のおかれている自治体の協力を得て、全国共同利用の研究会開催、啓蒙ビデオ・冊子の制作、シンポジウム・講演会・出前授業を行う。	北海道陸別町、愛知県豊川市
地域課題	中京圏における地震防災ホームドクター計画 (大学院環境学研究科)	中京圏の防災力の向上のため、自治体・ライフライン事業者・民間技術者との研究交流の場を作ると共に、自治体衛星通信を利用して地元自治体と連携した防災リーダー作りを行う。また、地域の災害情報を一元化したウェブシステムを構築すると共に、災害研究資料アーカイブ・災害交流拠点を名大内に設置する。さらに愛知県下の中核都市の強震動評価を最新の知見により実施し、各市の防災対策の基礎資料を提供する。同時に、当地の国立大学間の災害対応協力体制を確立する。これによって、東海地震・東南海地震への地域の防災対応に対して名大が責任を持って対応できる体制を作る。	愛知県、名古屋市
	環境教育拠点形成支援(長久手平成こども塾) (大学院環境学研究科)	長久手町を実験の場として、専門的知見を活かした質の高い環境教育プログラムを開発し、大学と地域連携による環境教育手法の研究、学生の実践教育の場を構築する。	長久手町
	計 10件		



## 第44回名大祭「夢空間」が開催される

第44回名大祭が、「夢空間」をテーマに6月4日(水)から8日(日)までの5日間開催されました。今回の名大祭のテーマである「夢空間」は、夢は人それぞれ。大学は多くの人の夢を叶えることのできる場所であり、名大祭もまたそんな場所であることを願って付けられました。

開催に先駆けて、5月18日(日)「仮装行列2003～夢見る名大 Walker～」、5月30日(金)31日(土)「Good Night は言わないで徹夜でスケート'03～Ice



模擬店ストリートの様子

Nice Paradise～」がプレ企画として行われ、名大祭の雰囲気盛り上げました。

特設ステージでは、名大祭の始まりを告げる「Opening Ceremony 2003～夢のはじまり～」、平日期間中には、「第27回 The Green Festival」等が行われ、最終日には、「幻夜祭～幻界への挑戦～」が盛大に行われました。他にも総合大学の特色を生かした「研究所・研究室公開」、名大生の声を載せた「名大生白書」の配付、学生や教職員が合同で歌う「六団合同合唱祭」、37回目を数える「FIRE STORM」及び近年注目を浴びているよさこいを踊った「名大よさこい祭り」等多



FIRE STORM

様な企画が実施されました。

また、最終日には、デビュー作「すべてがFになる」等の人気作品で知られる作家の森 博嗣氏の講演会が行われ、会場の豊田講堂には、多くのファンが詰めかけました。参加者は、講演及びその後の質疑応答を通じて、森氏の人柄にふれることができました。

今回も数多くの学内関係者や一般市民が参加し、4万人を超える来場者を迎え、大盛況のうちに幕を閉じました。



名大よさこい祭り



## 生物機能開発利用研究センターの 銘板上掲式が行われる

本年度、学内共同教育研究施設として設置された生物機能開発利用研究センターの銘板上掲式が5月23日（金）行われ、関係者が見守る中、松尾総長、伊藤副総長、山本生命農学研究科長及び山木センター長により銘板が上掲されました。

同センターは、時限到来により廃止された生物分子応答研究センターを改組・拡充して設置されたものです。生物分子応答研究センターは、平成5年にバイオサイエンスの最先端研究を行う施設として、農学部附属生化学制御研究施設と理学部附属淡水魚類系統保存実験施設を統合して設置され、主にモデル生物を用いてバイオサイエンスの基礎的研究を展開し、多くの先

端的な業績を挙げてきました。その結果、平成12年度には革新的技術開発研究推進費補助金（ミレニアムプロジェクト）、平成13年度には中核的拠点形成プログラム（COE）に採択され、その存在を全国に示してきました。

生物機能開発利用研究センターは、これまでのモデル生物を用いた生命現象に関わる高次生物機能の解明研究の一層の推進を図り、その成果を有用生物に移植する研究の進展を目指しています。また、大学の基礎研究と産業界の応用研究とのジョイント的な役割を担う組織として発展することが学内外から期待されています。



生物機能開発利用研究センターの銘板上掲式



## SARS 緊急対策ガイドラインに関する 全学説明会が開催される

重症急性呼吸器症候群（SARS）感染に対する緊急対策等を検討するため、部局長会の下に、中島副総長を委員長とするSARS緊急対策委員会を5月27日（火）に設置し、対策ガイドライン等の策定等について検討を進めています。その対策の一環として、6月19日（木）、工学部講会議室において、約150名の参加を得て、SARS緊急対策のガイドラインに関する全学説明会を開催しました。

説明会は、SARS対策の緊急性に鑑み、教職員、外国人研究者及び学生等が、医師の説明に基づくSARSについての正しい認識を共有したうえで、「対応についての基本的な考え方」、「対応ガイドライン」、具体的な「対応マニュアル」について共通の理解を持つことを目的として開催したものです。

説明会では、初めに、中島委員長が、知を集めて人類の福祉と繁栄に寄与することを使命とする大学が、地球規模のSARS制圧作戦を率先して推進することは、

社会に対する責務であり、地域医療全体のあり方に対して、SARS制圧のための適正な提言を行うことは絶対の義務であること、大学における国際交流の活動が、SARS感染拡散の原因となる事態は、絶対に避けなければならないこと等、委員会の基本的な考え方について説明しました。

次いで、同委員会の医療対応ワーキンググループ主査の武澤医学部附属病院長補佐が、SARS感染の基本理解、地域防疫体制における附属病院の役割及びSARS疑い例への対応等について、医療の立場からわかりやすく説明しました。

続いて、国際交流等関連ワーキンググループ主査の林総長補佐（国際交流担当）が、緊急対策ガイドラインに基づいて、対応の基本的な考え方等について説明を行い、また、受入マニュアルに基づいて、空港への出迎え及び受入教官の役割等について詳細な説明を行った後、参加者との活発な質疑応答がありました。



林総長補佐



中島副総長



武澤医学部附属病院長補佐



## 「第2回産学官連携推進会議」が開催される - 赤崎勇名誉教授が日本学術会議会長賞を受賞 -

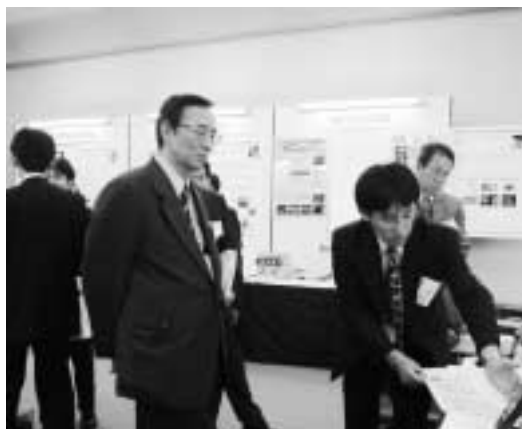
「第2回産学官連携推進会議」(内閣府、(社)日本経済団体連合会、日本学術会議主催)が6月7日(土)、8日(日)、国立京都国際会館で開催されました。同会議は、「産」、「学」、「官」の連携を経済再生の鍵として、産学官連携強化への取り組みを更に強固なものとしていくために、産学官連携のトップから実務レベルの者までが、集中的に議論し、その結果を政策へ反映し、大学や企業の活動に具体的に生かしていくことを目的として、昨年から開催されています。

会議には、本学から50名が参加するとともに、6研究室の研究成果、「新世代のナノカーボン物質の創製、評価と応用」(篠原久典理学研究科教授)、「誘導骨芽細胞移植術の併用による脚延長術」(石黒直樹医学系研究科教授)、「超高齢化社会の介護・医療・福祉と健康生活」(井口昭久医学系研究科教授)、「ソフトリソグラフィーのバイオ応用への研究開発」(成瀬恵治医学系研究科助教授)、「テーラード薬物治療に向けた病態時薬物体内動態スクリーニングシステムの構築」(長谷川高明医学系研究科教授)及び「ユビキタス社会を実現するP2P型情報機器連携システム」(河口信夫情報連携基盤センター助教授)を展示し、細田科学技術政策担当大臣、尾見前科学技術政策担当大臣他多数の参加者が本学のブースを訪れました。

1日目は、基調講演、特別講演に続き、「大学と知的財産戦略」他3テーマの分科会が開催され、それぞれで活発な討議が行われました。「大学と知的財産戦略」では、上田 実医学系研究科教授がパネリストとして参加しました。

また、2日目は、今年度から新設された、産学連携における優れた成功事例に関し顕著な功績のあった個人及び団体に、「産学官連携功労者表彰」が贈られました。全国から666件の推薦があり、本学から推薦した赤崎 勇名誉教授(「窒化物半導体による青色発光デバイスの開発」)が学術の視点から特に顕著な功績又は功労があったと認められるものとして「日本学術会議会長賞」を受賞しました。受賞理由は、開発が極めて困難とされた窒化物半導体の高品質結晶育成技術の開発に世界で初めて成功し、これが、現在、大きな市場となっている青色発光デバイスの実用化への道を開いたこと、及び大学における当該技術を基に企業において製品化された青色発光デバイスは、革新的技術として現在大きな市場規模を有しており、大学の革新的・独創的成果の実用化の代表例であることです。

最後に、毛利 衛日本科学未来館館長より「科学技術の人材養成 - 夢を実現する努力と創造」の特別講演があり、閉会しました。



河口助教授(右)から説明を受ける  
細田科学技術政策担当大臣(左)



日本学術会議会長賞を受賞する  
赤崎名誉教授(左)



日本学術会議会長賞の楯



## 大学院生命農学研究科が学術交流協定を締結する

大学院生命農学研究科は、理化学研究所 横浜研究所 植物科学研究センターとの研究協力の実施形態について、かねてから探ってきましたが、このたび、山本研究科長と杉山達夫センター長が学術交流協定書に署名し、正式な協力関係が成立しました。

理化学研究所 横浜研究所は、平成12年4月に設置された研究所で、ゲノム科学総合研究センター、植物科学研究センター、遺伝子多型研究センター及び免疫・アレルギー科学総合研究センターの4センターにより構成されています。また、植物科学研究センターは、国のミレニアムプロジェクトの一環として植物科学に関する次世代を担う先端研究を推進するために設立されたセンターで、我が国における新世紀の植物科学をリードするミッションに基づいて活発な植物バイオサイエンスが展開されています。

一方、大学院生命農学研究科は、平成14年度発足の

21世紀 COE プログラムにおいて、「新世紀の食を担う植物バイオサイエンス」の研究・教育拠点に指定されました。

両研究機関は、その研究理念・研究目標等において共通することが多々あり、それぞれ他方にはない特色を備えています。このような背景を考えたとき、両研究機関が密接に連携することは、それぞれの理念、目標を相互補完的にかつより加速度的に達成するためだけでなく、我が国の植物バイオサイエンスの発展に資するところが大であるという考えに基づいて締結に至ったものです。

両研究機関が連携することで得られる教育、研究面での効果は計り知れないものがあると考えられ、連携シンポジウムの開催、大学院セミナーの開催、個別共同研究の推進、研究施設・設備の相互利用等を通してその実現が期待されています。



学術交流協定を締結する山本研究科長（左）と杉山センター長（右）



## 中期目標・計画・評価に関する 職員説明会（第1回）が開催される

中期目標・計画・評価に関する職員説明会が6月5日（木）、文系総合館7階カンファレンスホールにおいて、開催されました。

この説明会は、法人化後の評価等において重要な役割を担うことになる事務職員に、評価のシステム等を十分理解してもらうことを目的とし、掛長（専門職員）以上を対象に、組織改革検討委員会目標・計画・評価小委員会（第1小委員会）と評価情報分析室の主催により開催されたもので、約100名の出席がありました。

説明会では、後藤副総長（同委員会委員長）の本学中期目標・計画の作成状況等の説明を交えたあいさつに続き、池田輝政高等教育研究センター教授（総長補佐・評価情報分析室長）の「大学マネジメントと評価」と題した、海外の大学における戦略経営論や戦略経営

の理論と手法を背景にした大学マネジメントがなぜ必要か等の内容による特別講演が行われました。

さらに、評価情報分析室の朝倉宏一助教授及び小湊卓夫助手から、現在同室で開発中の全学中期目標・計画と対応させた新バージョンの「名古屋大学マネジメント情報システム」についてのデモと説明がありました。

講演及び説明後には、質疑応答が熱心に交わされるとともに、アンケートには、「特別講演の時間が短い、このような機会をまた作っていただきたい」等の意見が多数寄せられ、出席者の関心の高さを伺わせました。

なお、この職員説明会については、今後2・3回継続的に開催していくこととしています。



あいさつする後藤副総長



説明会参加者



講演する池田高等教育研究センター教授





## 第99回国立10大学理学部長会議が開催される

第99回国立10大学理学部長会議が、本学を当番大学として、5月22日（木）23日（金）名古屋ガーデンパレスを会場に、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、東京工業大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、本学の各理学部長及び事務長20名の出席のもと開催されました。

会議では、大峯理学研究科長が議長を務め、文部科学省高等教育局専門教育課の吉村泰治課長補佐の説明に続き、各大学から提起された理学部及び理学教育に

関する8件の議題について協議した後、同会議として科学研究費、共同利用研究所及び入学試験等に関する提言をまとめ、後日公表することを確認しました。

会議終了後の懇親会では、前回当番大学の鈴木東北大学理学部長からあいさつがあり、活発な意見及び情報交換が行われました。また、次回当番大学の笹尾京都大学理学部長から次回にむけてのあいさつがあり、懇親会は、盛況のうちに閉会しました。



第99回国立10大学理学部長会議で議長を務める大峯研究科長



## 医学部組織工学（日立メディコ） 寄附講座の創設記念式典等が開催される

医学部は、今年4月に設置した医学部組織工学（日立メディコ）寄附講座の創設を記念し、5月22日（木）医学部鶴友会館において、学内外の関係者や教職員など多数の出席のもと、創設記念式典、講演会及び祝賀会を開催しました。

この寄附講座は、組織工学的手法による新たな移植用組織の開発を主たるテーマとし、すでに実用化されている培養粘膜や骨のみならず、今後の臨床応用が期待される歯や軟骨をはじめとした多くの組織の臨床応用に向けた研究開発を行います。

記念式典では、杉浦医学部長の式辞及び中島副総長のあいさつに続いて、株式会社日立メディコ代表取締役会長の宅間豊氏から祝辞が述べられ、次いで、上田実医学系研究科教授から寄附講座開設の経緯について説明があり、各務秀明同講座客員助教授から新講座の

今後の活動について抱負が述べられました。最後に、杉浦医学部長から、本学の教育研究の進展及び充実に寄与されたことに対する感謝の意を表し、宅間会長に感謝状及び記念品を贈呈しました。

次いで、記念講演会では、東京女子医科大学先端生命医科学研究所所長の岡野光夫氏による「細胞シート工学による組織再生医療」と題する講演が行われ、参加者は熱心に聞いていました。

記念祝賀会では、大島医学部附属病院長のあいさつに続き、京都大学大学院医学研究科教授の飯塚忠彦氏による祝辞が述べられ、中部経済産業局長の大道正夫氏の乾杯により参加者全員で同講座の創設を祝いました。最後に、高橋雅英評議員の謝辞により祝賀会も盛況のうちに終わりました。



式辞を述べる杉浦研究科長



杉浦研究科長から感謝状を手渡される宅間会長（右）



## (財)武田科学振興財団研究奨励金の贈呈が行われる

財団法人武田科学振興財団の平成15年度研究奨励金が、6月25日(水) 総長応接室において内林政夫同財団理事長から松尾総長へ贈呈されました。

この奨励金は、医学・薬学・理学・工学及び農学のライフサイエンスに関する科学技術の進歩、発展に大きく貢献すると考えられる研究への助成を目的とするもので、贈呈に際し、総長から奨励金を有効に活用するとともに、大学として研究等の発展に一層努力していきたいことなど謝辞が述べられました。

続いて、採択された3名の研究者からそれぞれ研究概要の説明があり、なごやかに懇談が行われました。

研究奨励金採択者及び研究題目は、次のとおりです。

- 杉山康雄 遺伝子実験施設助教授  
研究題目「高等植物ミトコンドリアのRNA 編集部位の解析」
- 人見清隆 大学院生命農学研究科助教授  
研究題目「皮膚表皮の防御システム構築に関わるカルシウム依存性タンパク質架橋反応」
- 秋間 広 総合保健体育科学センター講師  
研究題目「擬似宇宙滞在による骨格筋および呼吸循環系の適応 - 人類の長期宇宙滞在に向けて - 」



贈呈式の様子



歓談する内林理事長(左)と松尾総長(右)



# 電子密度分布に見る 化学結合の普遍性

森 永 正 彦

電子は原子同士をつなぐ糊であり、糊の性質が物質の物理的・化学的性質と関係していることは良く知られています。スーパーコンピュータの時代になり、計算科学も進歩し電子の状態の計算も昔に比べれば容易になっています。私は材料設計のために永年計算をしてきましたが、ここでは“電子密度と化学結合”に焦点を絞ってお話したいと思います。

最初に一例として、酸化マグネシウム(MgO)の電子密度の空間分布の計算結果を図1に示します。これは隣り合うMg-Oイオン間の電子密度 $\rho(r)$ の変化を、その自然対数 $\log\rho(r)$ をとって表したものです。対数をとったのは、 $\rho(r)$ が小さなところを見たいからです。酸素(O)の原子核の位置からの距離 $r$ が大きくなるにつれて、 $\log\rho(r)$ は単調に減少しますが、ある傾きをもって直線的に変化している領域が2つあることに気がつきます。この傾きは電子の主量子数 $n$ によって変化します。主量子数は原子のエネルギーや大きさをだいたい決定する量子数です。酸素の場合、 $r$ の小さな

ところの傾きは約15.75で、ここは主に1s電子からなりますので $n=1$ です。その外側のところの傾きは約6.61で、ここは主に2s,2p電子からなりますので $n=2$ です。ところで、水素原子のように電子が一つしかない、いわゆる水素様原子の動径関数では、傾きは2( $Z/n$ )となります。ここで $Z$ は原子番号ですので、酸素の場合には $Z=8$ を代入しますと、 $n=1, 2$ のそれぞれの傾きは、16と8になり、上記の酸素の傾きに近い値となっています。

酸素以外の幾つかの元素の計算結果を、図2にまとめました。いずれの元素でも、傾きは水素様原子の動径関数から予想される値に近いことが分かります。酸素のように多くの電子があれば、それら電子による核電荷の遮蔽効果が生じますので、傾きも異なってくるはずですが、実際は電子が一つしかない場合とよく似た傾きをしています。種々な酸化物を見ますと、酸素の $n=2$ の領域の広がり、結合する相手の原子によって敏感に変わりますが、傾きは変わりません。この事

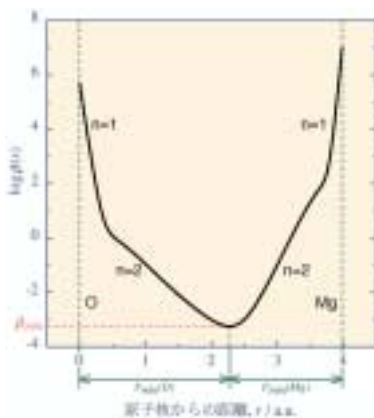


図1 酸化物MgOの最近接Mg-Oイオン間の電子密度の対数表示(1a.u.=0.0529nm)。図中に、最小電子密度 $\rho_{\min}$ とイオン半径 $r_{\min}$ を定義しています。 $r_{\min}$ には、O原子核からの $r_{\min}(\text{O})$ と、Mg原子核からの $r_{\min}(\text{Mg})$ の2つがあります。

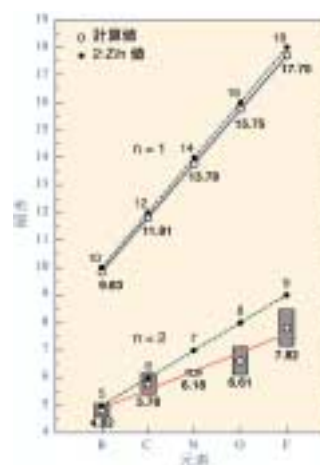


図2  $\log\rho(r)$ - $r$ 曲線の傾きの計算値と水素様原子の $2(Z/n)$ の値との比較

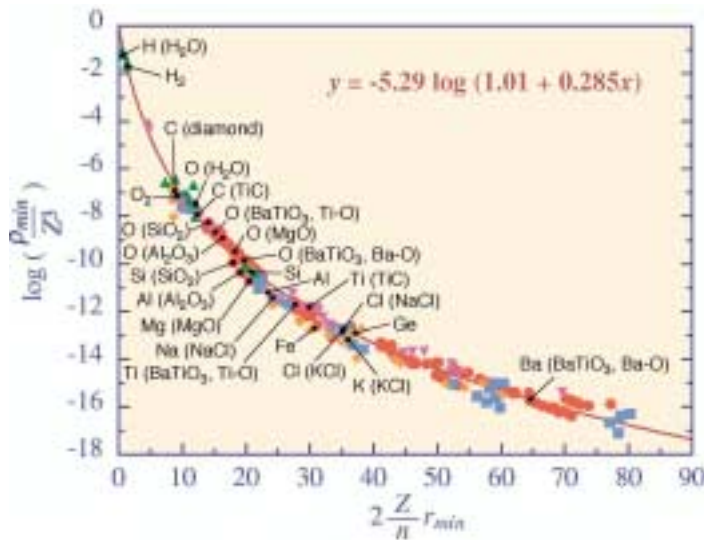


図3 種々の物質の最小電子密度  $\rho_{min}$  と原子半径またはイオン半径  $r_{min}$  の関係。図中の記号は、例えば、 $H_2$  は  $H_2$  中の H を、 $Ti(TiC)$ 、 $C(TiC)$  はそれぞれ  $TiC$  中の Ti、C を、 $Ti$  (または  $O$ )( $BaTiO_3$ ,  $Ti-O$ ) は、 $BaTiO_3$  中の  $Ti-O$  間の  $Ti$ (または  $O$ ) を表します。

情は、図2に示した他の元素でも同じことです。

次に、図1に示しましたように、電子密度が最小の  $r$  の位置を  $r_{min}$  とし、その密度を  $\rho_{min}$  としましょう。 $r_{min}$  は原子半径またはイオン半径のことです。約150種類の気体や固体でこれらを第一原理の計算(DV-X $\alpha$ 分子軌道計算)から求めて、図3にまとめました。その縦軸は  $\log(\rho_{min}/Z^3)$  で、横軸は  $2Z/n \cdot r_{min}$  です。水素様原子の動径関数を電子密度の形に直しますと、 $\rho(r)/Z^3$  は  $2(Z/n)r$  のみの関数となりますので、両軸をこのようにとりました。ただし、 $n$  は  $\rho_{min}$  近傍の電子密度分布をもとに決めます。例えば、図1の  $MgO$  では、 $O$ 、 $Mg$  の  $n$  値は共に2としています。 $Mg$  側で  $n=3$  の  $3s$ 、 $3p$  電子の領域が見えないからです。これは多分、 $Mg$  から  $O$  へ電子が移行しているためです。多くの純物質では、中性原子の基底状態での最も外側の電子の  $n$  と同じになります(例：鉄  $n=4$ 、ダイヤモンド  $n=2$ )。

このようにして描いた図3において、水素( $H_2$ )、酸素( $O_2$ )、水( $H_2O$ )、ダイヤモンド( $C$ )、金属( $Fe$ 、 $Al$ )、半導体( $Si$ 、 $Ge$ )、酸化物( $MgO$ 、 $Al_2O_3$ 、 $SiO_2$ 、 $BaTiO_3$ )、イオン結晶( $NaCl$ 、 $KCl$ )、金属化合物( $TiC$ 、 $ZrN$ )等、多くの物質が一つの曲線上にのっています。共有結合、イオン結合、金属結合に関係なくのっています。その意味で、これはどの物質にも共

通な「ユニバーサルな曲線」です。図中に示した  $y = \log(\rho_{min}/Z^3)$  と  $x = 2Z/n \cdot r_{min}$  の関係も簡単です。化学結合を電子密度から見ると、こんなに美しい関係が成立しているのです。

私は、このような電子レベルの計算を基にして、合理的な「物づくり」のための材料設計に取り組んで行こうと思っています。今後とも皆様の暖かいご支援をお願い致します。

### プロフィール

もりなが まさひこ

1946年大阪生まれ。1969年京都大学工学部卒、1978年米国ノースウエスタン大学大学院博士課程修了(Ph.D.)。1979年豊橋技術科学大学講師、その後、助教授、教授を経て、1994年名古屋大学工学部教授、1997年より工学研究科教授、2003年より高等研究院教官を兼務。専門は材料設計工学。エネルギー・環境関連の金属およびセラミック材料の合理的な設計法の構築を目指して、計算と実験に奮闘中。





## 博物館が第4回ネイチャーウォッチングを実施する

博物館が創設以来毎年行っている「中学生のためのネイチャーウォッチング」も、今年で第4回目となりました。今回のネイチャーウォッチングは、5月17日（土）に実施され、中学生19名、博物館スタッフ3名、特別参加の本学教育学部附属中学校教諭1名、計23名で知多半島の礫ヶ浦（つぶてがうら）海岸へ出かけました。

配布資料により、おおよその説明を受けた後、参加者は、早速海岸の岩場に出て、約2時間の海辺の生物観察を楽しみました。中学生は、黄色い「そうめん」のようなアメフラシやアmaksアメフラシの卵、緑色があざやかなミドリイソギンチャク、まだ小さなムラサキウニをはじめ、多種多様な生物を見て、びっくりしていました。また、引率の西川輝昭博物館教授は、

中学生からの数多くの質問に2時間答え続けていました。

昼食後は、同じ海岸で化石採集に熱中し、珍しい種類のウニの化石も含め、ほぼ全員が自力でいろいろな貝化石を採集することができました。予定時刻に、大学に戻り、足立博物館館長から修了証が中学生一人一人に手渡され、催しは無事終了しました。参加者から寄せられたアンケートには、「いろいろな生物・化石を見て、すごく勉強になった。また来たいと思う」、「次のネイチャーウォッチングにも参加したい」、「化石採集で化石がとれてとても嬉しかった」、「3年もお世話になりました。ありがとうございます」などの感想が書かれていました。



中学生の質問に答える西川教授



## 第4回エコツアー(スタンプラリー)が行われる

廃棄物処理施設・環境指導員室が、6月7日(土)8日(日)第44回名大祭の企画の1つとして、「第4回エコツアー(スタンプラリー)」を開催しました。

本学では、全国の大学に先駆けて「名古屋大学ごみ減量化宣言」を提唱し、ごみの発生を抑制しつつ、分別回収(20項目)を行い、資源の再使用及び再利用を促進する活動を全学的に進め、ごみの減量・資源化に大きな成果を挙げていますが、今回のエコツアーは、その活動を市民の方にもより広く理解してもらうことを目的として実施しました。

エコツアーは、本学のエコポイントである3ヶ所のチェックポイント(廃棄物処理施設、豊田講堂前及び古紙中間処理施設)を通過するスタンプラリーのことで、廃棄物処理施設では、ごみの発生量や処理方法等の説明、豊田講堂前のリサイクルステーションでは、ごみの分別回収クイズ、古紙中間処理施設では、古紙シュレッダーの体験とアンケートを実施し、全ポイントを通過した参加者には、記念品として、本学のごみの分類を説明したクリアホルダーや、本学の古紙をリサイクルしたトイレトーパー等が配られました。

今回は、過去最高である約400人の小学生や一般市民の方が参加し、ごみの分別方法やごみ問題について、楽しみながら知識を深め、環境にやさしい生活を送ることの重要性を実感してもらいました。

なお、参加者に対し実施したアンケートから、市民の方が本学のごみ問題への取り組みを高く評価していることがわかり、またごみ問題への関心の高さも伺わせました。

《アンケート結果》

設問：本学におけるごみの分類について

大変良い.....70%

設問：本企画について

面白かった.....34%

ためになった.....57%

設問：参加者個人がごみの分別回収について

よくやっている.....41%

どちらかといえばやっている...49%

設問：参加者個人が紙のリサイクル商品について

積極的に利用している.....25%

安価であれば利用している.....57%



第2チェックポイント・豊田講堂前



ゴール・古紙中間処理施設  
全ポイントをクリアし、記念品を受け取る参加者



## 太陽地球環境研究所が 一般公開・講演会を実施する

太陽地球環境研究所は、6月7日(土)、一般公開及び講演会を豊川キャンパスにおいて実施しました。この一般公開と講演会は、豊川市を中心とした近隣の一般市民に研究所の研究活動の内容を広く理解してもらうことを目的として、豊川市と同市教育委員会の後援を得て、平成3年度から毎年行っています。今回で12回目を迎え、毎回多くの市民が参加し、教職員・院生にとっても貴重な市民とのふれあいの場となっています。

当日は、天候に恵まれ、最終的な来所者数は記名した方だけで430名に達しました。小・中学生にも研究内容をわかしてもらおう工夫を凝らしたパネルや各種の実験・観測装置が展示され、さらに、見学者が自ら参加して行う企画・実験も多数行われました。いくつかの例を挙げますと、

- ・「空気の力で木を折ってみよう」: 新聞紙1枚を上に乗せた割り箸を机の角に半分はみ出させて置き、強くたたくと割り箸が折れる実験
- ・「電気ストーブで調べる地球の温暖化」: 赤外線を出すストーブと赤外線センサーの間に、数種類の気体を詰めたビニール袋を差し入れ、どれが赤外線を良く吸収するか(どれが地球温暖化に関係する気体か)を、調べる実験
- ・「高感度カメラでポストくらぶ(暗部)」: 夜間大気光観測に用いられる超高感度カメラで長時間露出の画像を撮り、

露出中の動きで絵を描く実験

- ・「紙コップでスピーカーを作ろう」: 紙コップ・永久磁石・コイルを組み合わせてスピーカーを作る実験
- ・「宇宙の天気を知ろう」: 太陽での爆発をいち早く感知して、宇宙飛行士や人工衛星に警告を出す状況を模型を使って見せる実験
- ・「ペットボトルロケット」: 空気圧と水の力でペットボトルを高く打ち上げる実験

また、午後から同研究所一階講義室で講演会が行われ、増田公明同研究所助教授による「年輪で見るむかしの太陽」と、関華奈子同研究所助教授による「人工衛星でさぐるオーロラのふるさと」という二つの講演が行われました。増田助教授は、木の年輪にわずかに含まれている放射性炭素の量を正確に測定することにより、過去千年の太陽活動を探る方法を解説し、過去の太陽活動が、宇宙放射線の量をコントロールすることによって地球の気候を変えていたかもしれない、という大胆な仮説を紹介しました。また、関助教授は、極地方の天空にあらわれるオーロラと、それを引き起こす宇宙空間プラズマの研究を紹介し、スペースシャトルなどの宇宙利用とこういった研究のかかわりを解説しました。両講演とも終了後には聴衆から多くの質問が寄せられました。



レーダーと光で探る北極の空



紙コップでスピーカーを作ろう





## 太陽地球環境研究所が 「理科はおもしろい」シンポジウムを開催する

太陽地球環境研究所は、6月8日（日）「理科はおもしろい」シンポジウムと題し、小・中学生の理科離れを考えるパネルディスカッションを、豊川市と共催で開催しました。このシンポジウムは、近年目立つ子供たちの「理科離れ」の原因を探り、対策を考えることを目的とし、NHK 及び中日新聞社の後援で行われています。豊川市にあるプラネタリウム「ジオスペース館」を会場にして、事前に用意された137席の整理券はすべて売り切れる盛況でした。会場では、NHK名古屋放送局の青木希久子アナウンサーの総司会のもと、ビデオ「太陽活動と地球気候」の上映（15分）、パネルディスカッション（90分）、プラネタリウムの上映（40分）が行われました。

パネルディスカッションのコーディネーターとして、上出研究所長、パネリストとして、教育の現場から豊

川市立中部中学校教諭で同市現職研修委員会理科主任の清水洋一氏、家庭から主婦、かみしばい会代表で子育てネットワーカーの鳥居久子氏、子供科学雑誌の編集者から「子供の科学」編集長の松島孝人氏、最先端の科学界から小島正宜同研究所教授と多彩な顔ぶれが揃いました。はじめにイントロダクションとして、上出所長が小中学生の理科離れの現状や特徴をデータを交えて紹介したのち、「理科離れ」で気がつくこと、その原因、そして考えられる対策を、家庭、学校、マスコミ、科学者などの立場から各パネラーが議論をしました。議論の合間には、客席からも活発な発言があり、オーロラを見た感動、虫の生態を触って感じたときの驚きなど、理科を学ぶ原体験となる感動を子供に与えていくことが大切であるという認識が広がりました。



パネルディスカッションの様子



## 附属農場が農業館を利用して 連続講演会（第1回・第2回）を開催する - 第1回「お米の話 - イネの遺伝学から学ぶ」 -

大学院生命農学研究科附属農場では、昨年度、文部科学省による地域貢献特別支援事業として、「都市近郊の農業教育公園」事業を実施しましたが、同事業の一環として、附属農場に併設された多目的室である「農業館」が今年3月に完成しました。

そして、農業館を利用した連続講演会の第1回として、5月17日（土）北野英己生物機能開発利用研究センター教授による「お米の話 イネの遺伝学から学ぶ」と題する講演会が開催され、学内外から50人ほどの参加者がありました。講演は、栽培イネの起源、稲作の伝来、イネの特徴、イネの利用法、栽培イネの多様性、遺伝資源の収集と保存及びイネのゲノム解析など、日本人なら誰でも知っているような事柄からイネ

に関する最先端の科学まで、一般市民向けに平易な言葉を用いて行われ、その後、活発な質疑応答が行われました。

次いで、参加者は、従来から附属農場で栽培されている、およそ3,000系統におよぶイネの育成状況を見学しました。北野教授は、現在、農場の水田を利用して、文部科学省によるバイオリソースプロジェクト事業において、イネに関する遺伝資源収集の共同研究を展開しています。昨年はほぼ1ヘクタールの水田を用いてこれらの系統のイネを栽培しましたが、今年度もほぼ同じ規模で研究が行われる予定です。見学会では、日ごろ見慣れない系統の早苗を前にして、質疑応答が繰り広げられました。



第1回講演会の様子



イネの育成状況を見学する参加者



## - 第2回「動物生産と地球温暖化」 -

農業館を利用した連続講演会の第2回として、6月21日（土）、喜多一美生命農学研究科附属農場助教授による「動物生産と地球温暖化」と題する講演会が開催されました。

講演は、畜産を取り巻く環境問題から始まりました。昔、畜産業は畜産物の鮮度を保つために都市近郊で営まれていましたが、高度経済成長に伴って都市圏が拡大し、畜産農家と一般市民の住居が隣接するようになりました。その結果、畜産公害が問題となり、最近では畜産排泄物の放置を禁止する法律が施行され、環境に配慮した動物生産技術の開発と普及が急務であることを参加者に認識してもらいました。

次いで、昨年日本が批准した「地球温暖化防止条約京都議定書」の解説があり、平成24年までに地球温暖化ガスの排出量を平成2年時点と比較して6%減少しなければならないことの説明がありました。地球温暖化ガスとしては、二酸化炭素が有名ですが、実はウシ、ヤギ及びヒツジなどのように4つの胃を持つ反芻家畜の口から放出されているメタンも大きな影響があり、無関係のように見える「動物生産」と「地球温暖化」が、意外なところで結びついていることを理解してもらいました。

講演後には、農場内で飼育されているウシやヤギの飼育現場や家畜排泄物を資源化するための施設を見学し、参加者からは様々な質問が寄せられ、地球温暖化問題に対する関心の高さを伺わせました。

なお、今後の講演会の予定は以下のとおりです。

第3回 7月19日（土）

講師：柴田生命農学研究科附属演習林長

演題：「森の伝染病 松くい虫」

第4回 9月20日（土）

講師：松田 幹生命農学研究科教授

演題：「食の安心・安全について-バイオ農産物との関係」

第5回 10月18日（土）

講師：長谷川明子氏

（東海地区ビオトープを考える会会長）

演題：「ビオトープと都市住民（仮題）」

第6回 11月22日（土）開催予定



飼育現場を見学する参加者



## 大学院生命農学研究科が消防訓練を行う

大学院生命農学研究科は、5月30日（金）災害への対応と防災意識の向上を図ることを目的に消防訓練を行い、生命農学研究科教職員・学生等約400名が参加しました。

当日は、千種消防署の協力のもと、A館486号室から出火したとの想定で、A館東研究棟消防隊を中心に西研究棟消防隊の一部と管理棟消防隊が加わり、通報、消防隊対応体制、避難誘導及び救護等の総合訓練を行いました。次いで、屋内消火栓の取扱い、放水訓練及

び消火器による初期消火並びに名古屋市所有の起震車で振動体験を行いました。

訓練終了後、千種消防署による講評と山本生命農学研究科長から日頃から防災対策には万全を期して欲しい旨のあいさつがありました。

続いて、講義室に会場を移し、上林千種消防署予防係長による「東海地震に備えて」と題した講演があり、多くの教職員・学生が予定時間を上回る講演に熱心に耳を傾けました。



救護訓練



消火器による初期消火



起震車による振動体験



## 構内環境美化運動 「キャンパスクリーンウィーク」 が実施される

「キャンパスクリーンウィーク」が、名大祭終了後の6月9日（月）から13日（金）に、全学の教職員及び学生の協力を得て実施されました。これは、構内の環境美化のために平成4年から毎年実施されているもので、各部局ごとに構内の除草や清掃が行われました。

事務局では、6月12日（木）、約90名の事務局職員が一齐に東山キャンパス構内及び周辺の市道に分かれ、清掃、雑草の刈り取り、測道に詰まった泥土の除去及び不要な立看板、ビラ等の撤去、整理等の作業を行い、爽やかな汗を流しました。



各々の清掃場所に向かう事務局職員  
(事務局2号館玄関前)



構内の清掃作業に汗を流す事務局職員

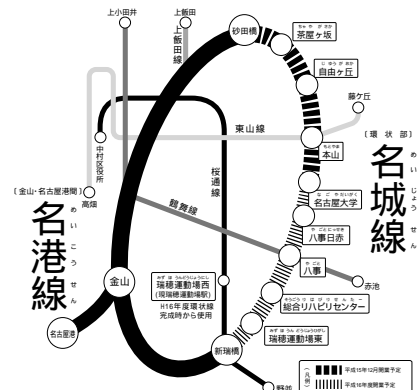


## 地下鉄「砂田橋 名古屋大学」間が 今年12月13日に開業

名古屋市は、6月16日（月）、市営地下鉄4号線「砂田橋 - 名古屋大学」間（4・5キロ）を今年12月13日に開業すると発表しました。これにより、「名古屋大学」を含め、「茶屋ヶ坂」、「自由ヶ丘」、「本山」の4駅が開業し、本山駅で東山線に接続することになり、本山経由での本学へのアクセス時間が大幅に短縮されることとなります。

また、「名古屋大学 - 新瑞橋」間（10・1キロ）は、平成16年度に開業する予定で、これにより、全国初の地下鉄環状線が完成する計画となっています。

なお、本学では、「名古屋大学」駅の開業に伴い、駅構内及び近辺に、市民とのふれあいの場をもうけるための掲示案内システムを設置すること等を立案中です。



地下鉄路線図



現在工事中の「名古屋大学」駅出入口

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（15年6月分）

	記事	月日	新聞等名
1	第44回名大祭4日開幕 テーマは「夢空間」 お笑いから先端研究まで多彩な行事	6.1(日) 6.4(水) 6.5(木)	中日(朝刊) 読売
2	備える：同震度でも被害に差 福和伸夫・工学研究科教授の説明	6.1(日)	中日(朝刊)
3	浪川幸彦・多元数理科学研究科長の数楽、数が苦：美しい性質 命題は簡潔な俳句のよう	6.2(月)	中日(朝刊)
4	産学連携の推進フェア「テクノ・フェア名大2003」を豊田講堂で開催 平野真一・工学研究科長らが講演	6.3(火)	日経(朝刊)
5	オユナナ児童基金協賛チャリティーイベント 名大祭期間中に豊田講堂ホールで開催	6.3(火)	中日(朝刊)
6	本学大学院生ら5人で学生ベンチャー企業「M-easy」を設立 知識を持ち寄り農業技術開発へ	6.4(水) 6.5(木)	中日(朝刊) 他3社
7	文部科学省が「教育改革フォーラム-教育改革の推進と教育基本法の改正について-」を開催 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授らによるパネル討論	6.4(水)	中日(朝刊)
8	豚の幹細胞から歯を作をつくりだすことに上田実・医学系研究科教授が成功	6.5(木)	中日(朝刊)
9	「歯の再生」研究 日立メディコが主体となり「歯胚再生研究コンソーシアム」を発足させ、本学など5大学が分担して研究する	6.5(木)	日経(朝刊) 中日(朝刊)
10	「再生つばさの会」記念シンポジウム 再生不良性貧血など最新情報を紹介 小島勢二・医学系研究科教授らが講演	6.5(木)	中日(朝刊)
11	東南海地震 熊野灘で超音波による観測に着手へ 安藤雅孝・地震火山・防災研究センター教授らのグループ	6.6(金)	中日(朝刊)
12	知的クラスター創成事業第1号「NUエコ・エンジニアリング」が設立された 後藤俊夫副総長と取締役に就任した堀勝・工学研究科助教授が開発したプラズマ診断技術を基に半導体製造装置などを開発・製造する	6.6(金) 6.7(土)	朝日(朝刊) 他3社

	記事	月日	新聞等名
13	東海近世文学会6月例会 院生・梁先希さんの研究発表「遊興とミエ-『西鶴置土産』巻-の1を中心に」と論読	6.6(金)	中日(夕刊)
14	憲法を歴史と今日の視点から考える「憲法の制定過程と現在」講師は法学研究科助教授・本秀紀・愛知憲法会議事務局次長	6.7(土)	中日(朝刊)
15	日本建築学会賞受賞者記念講演会 今年の実賞者、佐々木睦朗・工学研究科教授ら4人の講演と討論	6.9(月)	中日(夕刊)
16	社会科学者パーソンズの復権 元本学助手・高城和義・東北大学大学院文学研究科教授	6.9(月)	中日(夕刊)
17	文部科学省が「教育改革フォーラム」を開催 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授は「各学校が教育内容を定めるべき」と提言	6.10(火)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)
18	酒やたばこの害 遺伝子型で解毒度検査 医学部附属病院予防医療部など、希望者に無料で行う	6.10(火)	中日(朝刊)
19	研究室発：電子顕微鏡のゆがみ補正 田中信夫・理工科学総合研究センター教授	6.10(火)	中日(朝刊)
20	名大サロンの主役：「脳画像と能医療の最前線」と題し講演 「医療をネットワーク化し、すべての患者に高度医療を」 吉田純・医学系研究科教授	6.10(火)	中日(朝刊)
21	きらり：工学部1年マレーシア人のヌル・アフザンさん マレーシアで環境教えたい	6.10(火)	中日(朝刊)
22	名古屋大 COE「総合テキスト科学の構築」第4回オープンレクチャー 工学研究科 COE オフィスで開催	6.10(火)	中日(朝刊)
23	地震を知る3：やってみよう耐震診断 自治体から費用補助も 森保宏・環境学研究科助教授	6.10(火)	中日(夕刊)
24	国立大学協会が会長に佐々木毅・東京大学長 副会長に松尾稔学長に代わり梶山千秋・九州大学長と石弘光・一橋大学長を選んだ	6.11(水)	朝日(朝刊) 中日(朝刊)
25	予知最前線：本学や東大などが共同で進めるスーパーコンピュータを使った巨大地震シミュレーション実験 平原和朗・環境学研究科教授に聞いた データは膨大、実現は未知数	6.11(水)	毎日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
26	「市民社会」をキーワードにした講座「未来塾」を地域国際活動研究センターが開く 講師は佐藤安信・国際開発研究科教授ら	6.11(水)	朝日(朝刊)
27	医学部附属病院「宣言文」を設置「患者の人権守ります」	6.11(水)	中日(夕刊)
28	国公立で初めて医学部の診療部門と研究部門を分離 附属病院の自立を促進	6.12(木)	日経(朝刊)
29	医学部が開発したヘルペスウイルスを使ったがん治療の臨床試験 2例目の乳がん患者へウイルス注射を行った	6.12(木)	中日(朝刊)
30	法科大学院 国公立立合わせて72校開設予定 中部は6校が名乗り 本学はトヨタ自動車法務部長を客員教授として招く	6.12(木) 6.13(金) 6.14(土)	日経(夕刊) 他3社
31	来年4月の国立大法人化前に任期が切れる総長選考の暫定措置案について、全学説明会を開いた	6.13(金)	中日(朝刊)
32	教育の大地 ロースクール前夜 : 教授争奪仁義なき戦い 陣容手当て本学も苦悩	6.15(日)	読売
33	ホタルの発光触媒に脂肪酸合成機能を発見 チッソと大場裕一・生命農学研究科助手が共同で	6.16(月)	日刊工業
34	「理科はおもしろい」豊川でシンポジウム 豊川市と太陽地球環境研究所が共同で企画	6.16(月)	中日(朝刊)
35	イノベート・ジャパン宣言「モノづくり」私の提言 野依良治教授 日本は明確な国家目標を持ち「創る」志を育てよう	6.16(月)	日経(朝刊)
36	理系白書 私の提言：女性登用は組織の義務だ 元名古屋大教授・郷通子・長浜バイオ大教授	6.16(月)	毎日(夕刊)
37	砂田橋・名古屋大学間4.5キロ 開業は12月13日 名古屋市営地下鉄	6.16(月) 6.17(火)	毎日(朝刊) 他2社
38	公開トークセッション「美術館で学んでどんなこと？」 認知心理科学者の岡田猛・教育発達科学研究科助教授らが話し合う	6.16(月)	中日(夕刊)
39	日米欧共同 ALMA 計画 サブミリ波観測日本が中心となり、観測技術を開発 福井康雄・理学研究科教授のグループは、望遠鏡改革で挑戦	6.17(火)	中日(夕刊)
40	地震を知る4：福和伸夫・環境学研究科教授 想像力鍛えて危機意識喚起 まず家具の固定を	6.17(火)	中日(夕刊)
41	本学・次期総長選 現職「3期目」立候補を容認	6.18(水)	朝日(朝刊)
42	教育の大地 ロースクール前夜 : 合格率アップへ総動員 本学定員：80名、セールスポイント：充実したスタッフ、少人数教育で質の高い法曹を養成する	6.18(水)	読売

	記 事	月 日	新聞等名
43	税制改革の中期答申について 竹内信仁・経済学研究科教授 「消費税の二けた税率への引き上げ方針は、あまりにタイミングが悪い」	6.18(水)	中日(朝刊)
44	「分権時代における県の在り方検討委員会」の初会合で分権、広域連携を協議 委員会のメンバーは後房雄・法学研究科教授ら	6.18(水)	読売
45	日進 造成地に埋め立てられた産業廃棄物からメタンガス メタンガスに詳しい板谷義紀・工学研究科助教授は「ガスには異臭があるため気分悪くなる人も」と話す	6.18(水)	中日(朝刊)
46	高校時代をどう過ごすか 本学大学院の竹中千里・生命農学研究科教授らによるパネルディスカッションが菊里高校で行われた	6.18(水)	読売
47	老年医学が目指す方向などを日本老年医学会会長・井口昭久・医学系研究科教授に聞く お年寄りには横断的医療「社会全体で世話」を提案	6.19(木)	中日(朝刊)
48	老年医学の未来題材に全国学会 井口昭久・医学系研究科教授が「老いは高齢者本人だけでなく社会全体の問題。学際的な老年学の研究拠点が必要だ」と講演	6.19(木)	朝日(朝刊)
49	医療ルネサンス名古屋フォーラム「胃がんの予防と最新治療」シンポジウムには後藤秀実・医学系研究科教授ら	6.19(木)	読売
50	老年学：寿命を決めるもの 井口昭久・医学系研究科老年科教授	6.19(木)	朝日(朝刊)
51	訃報 成岡昌夫名誉教授 17日心筋こくそくのため死去	6.19(木)	中日(朝刊) 読売
52	名古屋工業大学は中部電力などと共同で、高校生にエネルギー教育をする「名古屋工業大学エネルギー教育研究会」を発足 研究会には本学などが加わっている	6.19(木)	日経(朝刊)
53	こう見る：教養教育 文理問わず充実を 奥野信宏副総長	6.20(金)	中日(朝刊)
54	社会に開かれた大学・大学院展 ロースクールについては、法科大学院設置準備室主任・和田肇・法学研究科教授らが「ロースクール開設に向けて」と題し講演	6.20(金)	朝日(朝刊)
55	愛知県が不妊に関する専門相談開始 面接は医学部附属病院で行われる	6.20(金)	中日(朝刊)
56	県の第三セクターなどが生活習慣病予防センサー開発へ 共同研究機関は本学や名古屋工業大学など	6.20(金)	中日(朝刊)
57	物質・材料研究機構と本学は、研究者・学生の交流と共同シンポジウム開催を目的とした研究交流促進協定締結で合意した	6.20(金)	日刊工業

	記事	月日	新聞等名
58	コーナーキック：キャンパス・クリーン・ウィーク 金井篤子・教育発達科学研究科助教授	6 20(金)	中日(朝刊)
59	愛知県などは名古屋市や名古屋東部丘陵地域を「あいち・なごやモノづくり研究開発特区」として来月申請 構想では本学など14の大学、専門学校などを中核とし、産学連携も進め、新産業の創出を図る	6 20(金)	中日(朝刊)
60	名古屋弁護士会 法科大学院の学費免除「寄附で奨学金」計画 来春開講を目指している本学など8校の各大学から10人を選抜する	6 23(日)	朝日(朝刊) 他2社
61	文化：学問荒らす大学法人化 池内了・理学研究科教授	6 23(月)	中日(朝刊)
62	神経細胞の膜に、入力と出力担う2種のたんぱく質分ける「情報の仕切り」発見 科学技術振興事業団のグループ(責任者：楠見明弘・理学研究科教授)	6 23(月)	朝日(朝刊)
63	第14回日本数学コンクール、第7回日本ジュニア数学コンクールが情報文化学部などで開かれる	6 23(月)	中日(朝刊)
64	きらり：経済学研究科博士課程一年、ガビィ・クルビエルさん 金融学びつつ陸上の選手も	6 24(火)	中日(朝刊)
65	工学部「テクノフロンティアセミナー」の参加者を高校生対象に募集	6 24(火)	中日(朝刊)
66	博物館特別展「失われた文化財 - アフガニスタン・パーミヤン展」 同展に関連した特別講演会など3イベントを開く	6 24(火) 6 25(水)	中日(朝刊)
67	本学は特許の取得・販売など知的財産を管理する専門部署「知的財産部」を年度内にも創設する	6 25(水)	日経(朝刊)
68	予知最前線：GPSの地震予知可能性 数ミリ単位の変動把握 鷺谷威・地震火山・防災研究センター助教授	6 25(水)	毎日(朝刊)
69	シリカ触媒でメタンをエタンと水素に変換 工学研究科の吉田寿雄助手が光り触媒反応に成功	6 25(水)	日刊工業

	記事	月日	新聞等名
70	医学部附属病院 大島伸一院長と井口昭久副院長が「大学院改革と地域医療」と題し講演 院長は「行政などと連携が急務」と訴えた	6 20(木)	中日(朝刊)
71	政争の町「また選挙か」津島市長が出直し選を視野に入れて辞意 後房雄・法学研究科教授の話「法的な穴といえるが、是非は選挙で。有権者の判断に委ねるべきだ」	6 .26(木)	中日(朝刊)
72	外国人が話す日本語サロン 講師はラフマン・シャフセインリ・国際開発研究科国際協力大学院生	6 20(木)	中日(夕刊)
73	ひととき：国立大学法人化 患者本位の改革したい 大島伸一・医学部附属病院院長	6 27(金)	中日(朝刊)
74	乗馬器具を使った運動が糖尿病に効果 松下電工先行技術研究所と佐藤祐造・総合保健体育科学センター教授らが学会で発表	6 27(金)	中日(朝刊)
75	ベガス星座の「アルゲニブ」が星の誕生過程を知る手がかりになることが、本学が設置した電波天文台「なんてん」での観測で判明	6 27(金)	毎日(夕刊)
76	アップデート：まだまにあう名古屋栄のアートピア 茂登山清文・情報科学研究科助教授	6 27(金)	朝日(夕刊)
77	宇宙観測の最新の研究成果を紹介する天文学講演会「宇宙の新しい素顔をさぐる」が「なんてん」の画像交え豊田講堂で開かれる	6 28(土)	中日(朝刊)
78	「高大連携」広がる 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授は「より多くの学生が高大連携の利点に出会える機会を与えることが課題」と話す	6 30(月)	中日(朝刊)
79	浪川幸彦・多元数理科学研究科長の数楽、数が苦：アキレスと亀 「無限」をきちんと考える	6 30(月)	中日(朝刊)
80	ターミナルケアと看護のこころ 安藤詳子・医学部保健学科助教授に聞く 緩和ケア、態勢作りを痛み軽減に看護師の役割	5 .12(月)	読売



## お詫びと訂正

名大トピックス No.120号（平成15年5月30日発行）

ちょっと名大史 下から4行目「杉山直明氏（1967年度退職）」を  
「杉山茂雄氏（1969年度退職）」に訂正させていただきます。

名大トピックス No.121号（平成15年6月30日発行）

2ページの『大学院情報科学研究科入学式及び看板上掲式が行われる』に  
誤りがありました。「社会システム学」を「社会システム情報学」と訂正さ  
せていただきます。

20ページの『今年度の学校見学が始まる』に誤りがありました。「山本  
直人文学研究科助教授」を「山本直人文学研究科教授」と訂正させていた  
だきます。

23ページの「平成13年度中央防災会議において、想定東海地震防災対策の  
推進に関する特別措置法が成立し、名古屋市が政令指定都市として初めて強  
化地域に指定されることとなった。」を「平成13年度中央防災会議において、  
想定東海地震の震源域見直しが行われ、名古屋市が政令指定都市として初め  
て東海地震対策強化地域に指定されることとなった。」と訂正させていた  
だきます。慎んでお詫びします。

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

## 名高商梅檀（センダン）と 樟（クスノキ）

本学経済学部第1講義室に通じる屋外階段に向かって右側（西側）の少し離れた場所に1本の大きな樟があります。約40年前、その場所に樟はありませんでした。1964（昭和39）年、そこには酒井正三郎（正兵衛）経済学部教授の退官を記念して、1本の梅檀の樹が移植されました。酒井正三郎は、1925（大正14）年に本学経済学部の前身校である名高商（名古屋高等商業学校）の教官となり、その後1964年3月に退官するまで経済学部教官として本学に貢献しました。その間、初代法経学部長（名高商の後身校である名古屋経済専門学校長を兼任）ならびに初代経済学部長を歴任しています。

退官記念樹の梅檀は、もとは名高商（現在の名古屋市立大学医学部）の玄関付近にあったものですが、名高商時代から名大経済学部時代を歩んだ酒井正三郎の足跡と重なりつつ経済学部の歴史を見守る樹として移植されたのでした。残念なことに、その梅檀は、大学紛争時の学生間の騒動で傷つけられ、その後立ち枯れてしまいました。

一方、現存する樟は、当時を知る人の話によると、梅檀の移植後にその西側に植えられたもので、梅檀と樟が並んで立っていたとのこと。梅檀が存在しない現在、樟はその役目を引き継ぐかのごとく、新緑に萌えています。



酒井正三郎名誉教授（1965年頃）



現在の樟（左横にあるのが屋外階段）



梅檀と樟（「経済学部卒業アルバム」1969年度）  
左端に梅檀（右奥）と樟（左手前）が写っている



東山キャンパス

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、  
大学史資料室（052-789-2046、[nua\\_office@cc.nagoya-u.ac.jp](mailto:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)）へご連絡下さい。